

# 大陸（北支）

## 追憶

兵庫県 小川 政 司

戦後、六十有余年の歳月の記憶のあなたに、今も胸奥に結晶したいくつかの事項を回想します。異国の地にて「護国の鬼」となった、多くの戦友の顕彰にでも、いささかなりとも役立つようであればと、御祈念申し上げます。

思い起せば、昭和十五（一九四〇）年十二月一日、私は歩兵第四十連隊（中部・鳥取第五十三部隊）第三機関銃中隊要員として現役入隊でした。

当時、徴兵検査は日本男子二十歳にして徴兵検査を受けるべしと国民の三大義務の一つでした。甲

種とは身体頑健にしていかなる困難にも打ち勝つ肉体、精神を持った日本男子の模範である。

その他第一乙種・第二乙種・丙種まで合格で、丁種は（身体不自由者）で不合格だった。また兵科も複雑で、編成によって名称が異なりました。

我が郷土は第十師団が徴収地区でした、兵庫県の岡山県、鳥取県の三県です。第十七師団「月」兵団は留守担任。第十連隊（岡山）、歩兵第三十九連隊（姫路）、歩兵第四十連隊（岡山）及び歩兵第六十三連隊（松江）の四個連隊が主力で、外に騎兵第十連隊（搜索連隊）、砲兵第十連隊、工兵第十連隊、輜重兵第十連隊、その他師団司令部直轄で通信隊、防疫給水部、兵器勤務隊、病院等の部隊がありました。なおこのうち工兵連隊は岡山でし

た。兵員は一万二千人から時には増加部隊も加わって一万五千人にもなりました。また作戦上の配備や移動により兵員数の増減がありました。

終戦時までの当地での編成留守担任部隊は、自分の知る限りでも、第十師団（「鉄」兵団）、第一〇師団（「鷲」兵団）、第十七師団（「月」兵団）、第五十四師団（「兵」兵団）が、その他混成師団（旅団）等々数兵団がありました。

私たちは前述の第五十三歩兵連隊第三機関銃中隊にて軍装を整え、僅か数日にて出動命令が発動されました。深夜の鳥取駅頭には見送りもなく、全員無言にて蕭々と乗車、汽笛も静かに、控えめに「ホーホー」と鳴っていました。翌日宇品より出航しました。二日目ぐらいには海水が「黄色」に濁っていました。岸壁に着岸して「下船」の命令が出ました。

北支の大沽でした。ここより列車にて常州「駐屯地」に到着。翌日は早朝から起床喇叭で起されました。「貴様たちは現役兵だ。補充兵の鑑となる

べく頑張るのだ」と活を入れられました。第一に大きな声を出すこと。そして早飯と早糞だ。などで少しの時間的余裕もない、現地での初年兵教育でした。

陸軍の華は歩兵です。その歩兵の第一番手は機関銃中隊だといって励まされました。自分も人後に落ちることなく一生懸命に張り切って頑張りました。その甲斐あつて一選抜で進級しました。なお鳥取県は人口が少なく、鳥取連隊区は歩兵のみで、但馬地区と播州北部（穴栗郡・佐用郡・神崎郡）より入営しました。同じ田舎者でも「播州男は骨があるのだ」と、人後に落ちることなく絶えず一番に先陣を切って進みました。

鉄道警備・討伐等に参加して翌年四月には徐州へ移駐し、北支肅県に來ました。歌「麦と兵隊」そのまんまの麦また麦の大平原でした。敵襲で出陣すれば敵は雲か霞と遁走し、後刻再び現れるという。一進一退の戦の繰り返しでした。

地の理を熟知している敵軍、そして彼等にして

見れば日本軍は闖入者である。畏に掛かって倒れた戦友、面従腹背の現地人との交流、今静かに思う時、我が軍は点と線の占領地でした。一兵卒の私には何か空虚な進駐であり、討伐行だったと思う。

飛行機、戦車もなく、極めて牧歌的な治安維持だった。局地的な共産八路軍の出現に対しての討伐戦だった。現地人からは自分達の重機関銃の威力を頼られ、歓迎された。麦秋時に於ける強制徴収もあった。蒋介石正規軍と共産八路軍、そして日本軍への献上食品等もあって、現地農民も大変だっただろうと思う。

昭和十八年八月、南方転戦が下達され、江湾付近の兵舎に集結しました。そして連日対米戦闘訓練と熱帯地についての衛生教育を受けました。マラリヤの予防薬「キニーネ」を支給され、九月二十日の夜陰に三隻の輸送船に乗船しました。自分達の船舶は八、〇〇〇トン級「清澄丸」といい昭和十五年に進水した優秀船だと言われました。船

倉は櫓を幾段にも組み、座るのが精いっぱいすし詰めでした。船底より見上げると、小さな昇降口を通して天空が眺められました。もし魚雷を一発受けたならば「全員お陀仏だ」とささやき合ったものでした。海軍の駆逐艦や海防艦が遠く近くと四艦ぐらいで護衛してくれていました。船団はジグザグコースで航行してトラック島に寄航しました。「甲板に出て見よ」の声で船外を眺めて驚きました。今眼前には日本海軍の誇る連合艦隊の偉容が見えられ、感無量でした。

船団は一路南下し、途中米軍哨戒機に発見されて緊張しましたがスコールと夜陰に難を逃れて無事にラバウルに上陸しました。時十月五日の払曉でした。

すぐ武器弾薬、糧秣、医薬品等の揚陸作業に掛かりましたが、突然即刻南方二百五十キロのブーゲンビル島へ派遣が命令され、兵たちは各自の武器、武器のみを持って駆逐艦「文月」他三艦に分乗して出航しました。その他の物資等は後便にて

送付するとのことでしたが、後日判明したところによれば我々の携行武器以外、残しておいた兵器・装具及び各人の私物に至るまで一切、友軍に持ち去られたとのことでした。

「文月」は戦闘配備のため全速運転で飛ぶかのごとく波頭を蹴って疾走しました。海軍さんは平然としています。自分達陸兵は籠の中で芋を洗うごとく前後、上下、左右に揺れる状態では座っただけでも転げ回る有り様でした。翌六日早朝に陸地が見えたと思ったら、ここが上陸地「タリナ」で、艦は海岸の砂浜に乗り上げました。海軍士官に「迅速、迅速」とせき立てられて、兵器・弾薬など一切を海中に投げ込み、兵員は飛び込み、兵器・弾薬は、後刻海中より拾い上げた次第でした。駆逐艦「文月」が引き返すと間髪を入れず敵の偵察機が飛来しました。即、出発となり、目的地は「チンプツ」である。炎暑の上に重装備の強行軍で落伍、脱落する兵士も多くいましたが、自分一人で精いっぱいのために無視して進軍しました。

彼らにも故郷には親や姉妹がいるだろう。心の中で手を合わせて赦されよ、でした。

第六師団（「明」兵団）は九州南部の熊本・都城・鹿児島と一部大分出身者の編成部隊で、南九州は尚武の国・鬼より怖い清正師団と人はいっていません。十一月に、その「明兵団」の警備地「タロキナ」に米軍が大挙来襲し、艦砲射撃と爆撃によって友軍は全滅しました。直ちに敵の陸上部隊が上陸して飛行場建設を行いました。全機械化兵団でブルドーザーで道路を建設し、滑走路には金属製のネットを張り、即完成で飛行機が離着陸していません。周辺の密林（ジャングル）も敵の砲弾・焼夷弾にて完全な禿山となり、我が方の攻撃は夜襲戦法（斬り込み隊）以外に方法なしでした。敵は要所に集音器を設置し、異常音を聴取すると即探消灯でその地点を照らす。または照明弾を打ち上げて真昼のようでした。我が方の攻撃方法は肉弾攻撃以外、何もなく、そして鍛えに鍛えし日本軍歩兵連隊も、炎暑の上に食料なく、熱帯地

方特有の風土病とマラリアにて倒れし者幾千という状況でした。

我が重火器部隊は重量の武器も弾薬も移動する度に力尽きて、自決の兵も多く出ました。動けぬ兵はそこに放置されました。兵力は日々減少し、重機関銃も移動するにつれて逐次分解され捨てていきました。そして食料の収集が第一となりました。草木の芽や芯はもとより、生物はカエル・蛇・トカゲ・ネズミなどすべて食糧にしました。生水で空腹を癒し、動ける者は全員食糧収集に奔走しました。よろける足を踏みしめながらです。精神が狂い、大声を出して彷徨する者、上官命令で射殺された戦友もいたかと聞きます。

昭和二十年三月、第二次「タロキナ」作戦が計画され、千メートル級の山嶺越えでしたが武器・弾薬・少量の糧秣等をすべて人力で搬送しました。明日は全軍突撃だという前夜に敵軍の観測機が飛来しました。友軍の布陣が判明した所に照明弾を幾百と落とし、空・陸・海から雨霰と砲弾、爆弾、

焼夷弾、黄燐弾など多種多様の攻撃で、鬱蒼たる密林が夕方から翌日早朝までに一枝一葉も無くなり、焼野原となりました。

戦死傷者は数知れず、作戦は完全に挫折し、この作戦を契機として軍の戦は受動的なり、兵力の温存方針に転換しました。各隊は空から敵の艦載機と観測機及びゲリラ等の襲撃を充分警戒しながら農作業、しかし開墾に全力を注入し、薩摩芋などを植えました。結果的には何の成果なく終戦となったのです。

敵軍の観測機が飛来し、旋回しながらビラ（伝単といった）を幾百枚も撒布して飛び去りました。その文面は、「皇軍兵士ニ告グ。待望ノ平和再ビ来レリ、日本帝国ガ、天皇陛下ノ命ニヨリ、連合国ト講和スルニ至ツタ、事実ヲ吾々ハコノ一紙ヲ以テ諸兄ニ通知ス、君達ノ気付ケル如ク、吾ガ軍ノ射撃ハスデニ中止サレタ。君達ハ自ノ本部ニ集合シ将校ノ指導ニ従エ。一同ガ秩序正シク吾ガ線ニ来得ル様ソノ方法ガ講ジラレツツアル」以上のよ

うでした。そして今一枚、指揮官及び将校に宛てた「ビラ」でした。

反戦宣伝だと一笑に付しました、何か異状でした。前日から本部に出張中だった中隊長は昭和二十年八月二十一日夕刻ごろに帰隊され「幹部集合口」で即全員呼集となりました。中隊長は台上に直立不動の姿勢にて「中隊全員に告ぐ、八月十五日正午に、畏れおおくも。天皇陛下の玉音放送がありました。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、以て万世のために太平を開かむと欲す。……」と勅語を朗読されました。

私は終戦とか特に残念だの悔しいなどの感慨はありませんでした。多くの戦友が郷里を遠く離れた南溟なづめの地に矢弾に倒れ、病魔と闘い、その上に餓死して逝った。自分はもちろん、全員気力も喪失、眼力も無くし、ただうなだれて中隊長の言葉聞いていました。南国の夕映えで天空には昨日と同じような星々が綺羅めいていた。

武装解除も坦々に行われ、下士官、兵士は「夕

ロキナ」から「ファウル島」に收容され、豪軍の使役として雑用に従事させられました。翌年の二月ごろから、臥床患者の復員が始まりました。その後、逐次復員帰郷して行きました。復員船は「鳳翔」「葛城」など旧海軍の航空母艦で、大竹や佐世保港に上陸、復員手続と検疫などを終了して自宅へと急ぎました。

中にはその足にて病院へ転送された者も多くおりました。

終わりに、私は生還しましたが多くの友がお国のために散華しました。二度とこの様な悲惨な戦争の無きことを念しながら余生を生き抜きたいと思えます。